
星降る宴

御紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星降る宴

【Nコード】

N0474R

【作者名】

御紋

【あらすじ】

ミアさんはトンガ村の『降る星亭』の看板娘。

皆に愛される彼女にはいつも寝てるペットのゴンタくんがいるよ。

まあ、あれだよ。

荒唐無稽なファンタジーの片隅で日常風景営んでる少女がいるってことなんだよ。

まとめてしまえば、『愛しい』でしょう？

気ままに、またもや気分転換。

優しい物語りの書き方を練習したいなと思って書き始めました。

【不定期更新・短文更新・よろしければ『ほっかり』してください】

？

ミアさんは辺境にあるトンガ村の宿屋兼食堂兼居酒屋の「降る星亭」の看板娘です。

ミアさんは父親譲りの黒髪と、母親譲りの小麦色の肌を持つ15歳の娘さんです。

「ラクトさん、あたし玄関掃除いつてきまーす」

「はいよー」

厨房でじゅわじゅわと脂を溶かしながら焼けてる肉に香辛料を散らしながら、コックのラクトさんが返事しました。

「じゃあ私は食堂のテーブル拭くわね」

「お願いします。アイリスさん」

ラクトさんの奥さんのアイリスさんが布巾片手に声をかけてきたので、素直にミアさんをお願いしました。

ざっざかざっざか。

枯れ枝を竹の先にくくりつけた竹箒で降る星亭の玄関前を掃いてるミアさんの格好はこの村の特産品である麻生布を叩いて洗いざらして縫製したワンピースだ。

腰に巻いてるサッシュベルトは、裏山の鵬夫婦の羽毛で織った特製品。

お日様にかざすと真っ赤な色にきらめくそれはミアさんもお気に

入りの一品です。

「おはよう、ミアさん、……おっと危ない」

「あれ？ ごめん大丈夫だった？ おはようヤンさん」

ざっざかざかかと掃いてた竹簾の先に振り払われる寸前だったグンデルコビトのヤンさんに御挨拶するミアさん。

うっかりと朝から被害者を出ところだったとミアさんは自分の行動に焦ったようだった。

「いやいやこちらこそ、いきなり顔を出して申し訳なかった。

ミアさん、今日のランチはもう決まったかね？」

ヤンさんは、地面に空いたコビトの穴からひょこりと身体を半分ほど出して、ミアさんに尋ねた。

「今日のランチですか？ たしか【クラフトンの猪肉はさみ（唐味噌タレ付き）定食】と【闘魚の一夜干し焼き定食】、あとは【蒸し蒸し野菜の4種タレ付きセット】……って、ラクトさんが言ってたよ」

もちろん、お酒はいつものどおりの別料金です。

にこりとメニューを述べた笑顔は、今日も看板娘なミアさんそのものだった。

？

ミアさんは、トンガ村の【降る星亭】の看板娘だ。

彼女は【降る星亭】で小さなころから過ごしてきた。

親代わりのコック夫婦は龍人族のラクトさんとその妻であるアイリスさん。

以前までは、片足が義足の狐人族のエフリーさんもいたんだけども今はいなくなった。

なんでも昔馴染みに呼び出されたとかで、都に行ってしまったとか。

ミアさんとしては大好きな家族の一員だったおやつさんがいなくなって寂しかったんだけど、こればかりは仕方ない。

お仕事だからね、ミアさんだってお仕事とか信用とか約束とかそういうことが大事だったことはよく知ってるんだ。

「ラクトさん。ゴンタくんのご飯ってもう持っていきました？」

ミアさんが叫んでる。

星降る亭のご自慢の厨房の中で、小麦の粉を炒ったり混ぜたりこねたりしてたラクトさんがその長身を起こして返事をしたよ。

「いや、まだだ」

ちょっとハスキーボイスなラクトさんの声は、奥さんであるアイリスさんが一目ぼれしたほどのいい声だ。……あれ？　もしかして一声惚れっていったほうが正しいのかなあ？

まあ、どちらにしても降る星亭のコック夫婦が仲が良かったことは確かだから、もしかしくなくても声がいいとか力があるとか料理が

上手とかそんなことはこの際どうでもいいことだったのかもしれないね。

なにしろ、アイリスさんはラクトさんにべた惚れだからさ。

「準備はもう出来てるんだ。 ミアさん、ゴンタを呼びにいつてきてくれるかい？」

「はい。了解ですよ」

口元に飛んだ小麦粉を手首で拭いたりながら、ラクトさんはミアさんをお願いした。

赤い短い髪がトレードマークのラクトさんの胸元には、アイリスさんが作ったエプロンが付けられている。

毎日毎日調理するときに肉の脂や魚の血なんかが飛んで服を汚してしまいうラクトさんのために、アイリスさんが村の裁縫名人であるホビット族のアンネお婆さんに教えてもらいながら縫ったエプロンだ。

実は、意外にもアイリスさんに惚れこんでるラクトさんにとってとても大切なお仕事道具だったりするんだ。

「ゴンタくん、今日はどこで寝てるのかなあ」

ミアさんはちょっとだけ考えたあとで歩き出したよ。
思いついた場所があったのかな。

？

ミアさんの住んでるトンガ村には、人魚が住んでる泉がある。

海にも山にも繋がってるんだよって自慢げにいつも言ってるのは、泉の人魚たちの末の娘のエルちゃんだ。

正しい名前は『エルシード』っていうんだけど、エルちゃんはそれじゃあ可愛くないよといって皆にエルちゃんって呼ばせてるのさ。ミアさんは紐で結び上げた布靴で村の道をぱたぱたと駆けていたよ。

「エルー！ エル！ ゴンタくん知らない？」

口元に右手を当てて、それはもう湖に響き渡るようななめらかな声でミアさんはそう訊いたんだ。

「……しゃ……い……」

ちょうど、朝日の恵みを頂いた後の日向ぼっこを兄妹としていたエルちゃんが、身体を起こして返事をしたようだったけど、残念ながらうまいこと声が出なかったようだったよ。

「エル！ 聞こえないよー。もういつかい言ってー！！」

ミアさんは力もあるし明るいし声もよく通る笑顔の可愛い素敵な娘さんだけど、聴力は普通の人だったから訊き返すことにしたようだったよ。

ぱしゃんと水の音がしたと思ったら、湖の中央にある人魚たちの遊び場でもある岩屋からエルちゃんが湖のなかへと潜ったようだった。

「もう、耳遠いわね！ ミアさんは！」

「ごめんね、エル」

だって、よく聞こえなかったんだよ。

ミアさんは申し訳なさそうに笑っていたよ。

人魚の泳ぎは速いからねえ。

いくら幼くてもさすがに人魚族なエルちゃんだ。すぐにエルちゃ

んは湖岸に立つてたミアさんのもとまで泳ぎ着いた様子だったよ。

「ゴンタくんだったらここで尻尾つりしてたけど、飽きたみたいで丘のほうにいつちゃったよ？」

星見の丘のほう！

エルちゃんはそう言つと、その薄い透明な水かきのついた指で丘を指差した。

ミアさんはそれを見て頷くと、彼女にお礼を言ってから星見の丘へと歩き出したよ。

「あ、エル。ゴンタくんの今日の釣果はどうだったー？」

思い出したように、ミアさんを見送っていたエルちゃんに声をかけながら。

「もちろん、今日もまる坊主！」

くすくすと笑いながら、エルちゃんが返事をしていたよ。

綺麗な色の貝殻のブレスレットを揺らしながら、ミアさんに手を振るエルちゃんの笑顔もやつぱり楽しそうだった。

「ふふふ。いつもどおりだね」

エルちゃんにもう一度だけ手を振ったミアさんは、ゴンタくんを探して歩き始めたよ。

「ざんねん。今日も遊んで貰えなかったのねえ、ゴンタくん」

ふさふさの尻尾を湖岸の縁から垂らしては魚釣りをしてるゴンタくんは、いつもよくこの村で見かけるものなんだってさ。

ただ、釣れてもすぐにゴンタくんは水の中に魚たちを返しちゃうんだけどね。

どうやら、つんつんと魚たちにつつかれる感触が楽しいだけらしい。

ゴンタくんらしいねって、ミアさんやラクトさんたちはいつも話してる。

ミアさんは素敵な笑顔で、ラクトさんたちはため息付きで。

受け止め方はその人によって違うようだけど、トンガ村での平和な暮らしの証拠だからねってミアさんは笑っていたよ。

嬉しそうに笑っていたよ。

？

ミアさんが住んでるトンガ村には、なだらかな丘が二つある。
その一つが、星見の丘。

広くて村を見回せるようなその場所は、冬になるとちょうどいい
雪遊びの場所になる。

丘のてっぺんから転がったら大きな雪だるまになってしまいそう
なほど、ミアさんは冬の季節になるとたくさんの服を着る。

寒がりなんだって。

そんなミアさんを見ると、ラクトさんはついつい美味しそうに肥
えた猪の子供を思い出すらしい。

一度だけ、ついうつかりとそのことを言っちゃったラクトさんは、
ショックを受けたミアさんに一カ月^{一ヶ月}の間、お喋りしてもらえな
かったそうだよ。

いつもならとりなしてくれる奥さんのアイリスさんにも、さすが
にそれは許せないと言ってフォローしてもらえなかったようだ
った。

おろおろした【降る星亭】のコックさんの姿はそれは貴重なもの
だったと、トンガ村の住人たちは今でも話しの種にしているらしい
もつとも、その話を聞くとラクトさんが不機嫌になり、ミアさん
は泣きそうな表情をするので【降る星亭】でだけは云わないように
してるようだね。

さて、星見の丘に着いたミアさんのお話に戻ろうか。

「ゴンタくん。ごはんの時間だよー？ 何処にいるのー？」

ミアさんは大きな声でペットのゴンタくんを呼んだよ。

ミアさんの声はとてもよく響いた筈だったけど、ゴンタくんはす

ぐには現れてはくれなかったようだった。
なにしろ、ゴンタくんは気促きまづだからね。

「ゴンタくん」

叫んだミアさんは星見の丘をぐるぐると見回したよ。

夜になると星空が一杯に広がるその場所には、いまは白く浮かんだ昼のお月さまだけがぼかりと見えたようだった。

星見櫓と皆が呼んでる場所には背を向けてミアさんはゴンタくんがお昼寝してそうな場所を探したよ。

星見の丘を囲む林の一角から聞こえた水音がミアさんは気になったようだった。

「ゴンタくん。そこにいるの？」

返事はなかったようだったけど、なんとなくミアさんはそこにゴンタくんがいると思ったようだった。

「ゴンタくん、みつけ！」

「……ウオン」

星見の丘の横をさらさらと流れている細い小川を、トンガ村の住人たちは『星の小川』と呼んでるんだけど、そこにゴンタくんは寝転がっていたようだったよ。

本当は綺麗に洗ってブラッシングすると銀色に光る筈のゴンタくんの毛皮に、ミアさんは抱きついた。

「ごはんの時間はまもりなさい！」

「……ウオ」

ミアさんの言葉に、ゴンタくんは仕方なさそうに返事していたよ。どうやら、決まりが悪かったらしい。

もふもふの今は土色に染まってるゴンタくんの毛皮からは、さらさらと小川の石が零れ落ちたよ。

星の小川には、綺麗な星の欠片のような細石かたがひいしがあるんだ。

森のことをよく知っている木こりのロンさんは、それは水縁石すいえんせきの欠片だねって教えてくれたよ。

砕けた水縁石のことを、トンガ村では『星の砂』って呼んでるら

しい。

星の砂を水のなかに沈めておくと、水は綺麗に浄水されるんだってさ。不思議でしょう？

でも一つだけ注意点。

星の砂は寂しがりだから、たまには星の小川に戻してあげないと水を綺麗にしなくなるんだってさ。だから、ミアさんもよく【降る星亭】の星の砂を交換にくるんだ。

たまに近所に住んでる穴狸^{あなたぬき}たちの子供たちがお駄賃のお菓子目当てで星の砂を交換しにきてくれることもあるけどね。

でも、食べ物を扱ってる【降る星亭】では毎日たくさんの綺麗な水が必要だからそれだけでは間に合わないんだ。

すぐに星の砂も疲れて仲間たちを恋しがって、水を綺麗にしなくなってしまうから。

だから、ミアさんは星の小川にはよく来るよ。雨の日だけは危ないからって止められてるからいないんだけどね。

お遣いに来る子供たちも、雨の日には小川で遊ばないように言いつけられてる筈だ。

「さあ、ゴンタくん。お家に帰るよ！」

「ウオンー！」

ミアさんの腰のあたりで、ゴンタくんがしつかりと叫んだよ。

ゴンタくんはミアさんに首を傾げて、上に乗るかい？って訊いたみたいだったけど、ミアさんは断ったみたいだった。

どうやら、今日は走っていききたい気分らしい。

「今度、また乗つけてね？　ゴンタくん」

「ウオンー！」

それでも、ミアさんだってゴンタくんの大きな毛皮につかまって

風を切って移動するのは好きだから、次の約束だけはしっかりと取り付けたみたいだったよ。

しっかりしてるでしょ？ ミアさんも。

？

冬が終わって、春がやってきたトンガ村だけど、風が鳴いてるときはさすがにまだ肌が寒さを教えてくるよ。

星見の丘のてっぺんから村の真ん中にある【降る星亭】までを一直線に走って降りる間に、ミアさんのほっぺは真っ赤に染まったようだった。

もちろん、寒さだけじゃなくて熱ってるのもあったのかもしれないけどね。

「ミアさん！ おはよ…う」

ゴンタくんと一緒に15歳の女の子が丘のてっぺんから駆け下りてくるのを見た新聞配達の途中だった獣人族のルドルフくんはちょっとびっくりしたようだったよ。

なにしろ、真っ赤なポストに入れた御町内ニュースを取り落としたくらいだったからねえ。

トンガ村は人口こそは少ないけど、それはいろんな種族の人たちがいるから、毎日のニュースにはことかかない。

たとえば、裏山の鵬夫婦の8羽目の雛がもう少しで孵りそうだとか、お祝いに御町内の婦人会では耐火レースのショールを編んでるとか、このまえなんかは鬼人族のグイさんのところに炒り豆が大量に送りつけられてきたのは一体どこの酔狂の仕業だとかそんなことまでニュースになっていたね。

トンガ村の図書館長のカウタルさんの名編集で作られてる【トンガ新聞】は、ときどき御町内のみんなのコラムやポエムなんかも載るので皆意外に楽しんでるようだったよ。

「おっ……………はよう……………」

「あ……………行っちゃったよ」

かすれた声でなんとか声を出したミアさんだったけど、そのまま

ミアさんは走り去ってしまった。

ルドルフ君への挨拶のために止まることもできないくらいのスピードだったミアさんの横では、ゴンタくんが面白そうに笑っていたよ。

ゴンタくんはいつ転んでもおかしくないようなミアさんにそのふさふさの毛を握られてしまっていたけど、別に痛くはないみたいだったね。

「ゴ、ゴンタくん。ゴンタくん。　　おいてかないで〜」

ミアさんは思ったよりも勢いがついてしまった自分の足がどうにか無事にスピードを落としてくれないものと祈っているようだった。

頼みの綱は、一生懸命に握りしめているゴンタくんの毛束だけ。いくらミアさんだって転ぶのは怖い。ましてや惰性の法則は異世界にだって当然生きているのだから、痛さはどれほどのものかと考えるとそれだけで恐怖だとも。

ぱたぱたぱたと、小さな砂ほこりがミアさんたちの走り抜けたあとには舞っていたけど、なにしろ時刻は早朝だからそのくらいのことは誰の迷惑にもなりはしなかったさ。

…可愛いものでしょう？

？（前書き）

このように書くにこそ、あなた方の心がほっとしますように。
＜

？

「あう、あう、あの、あのね。ゴンタくん」
ゴンタくんゴンタくん。

まだ走っていたミアさんは、つかまったままの彼女の友達の名前を何度も何度も呼んでいたよ。

「どうしようゴンタくん。もうすぐで「お家」なのに、止まれる気がしないよ〜」

ふえええええええ。

「……オン！」

泣きそうな顔で呟いたミアさんの言葉に、なぜかゴンタくんは元氣よく返事したよ。

「……ッ馬鹿ああああ。ずっと走ってなんかいられないに決まってるじゃないかああああ」

ゴンタくんのバカあああああ。

ミアさんは悔しそうだったよ。

どうやら、ゴンタくんはまだまだ走り足りなかったようだねえ。

朝ごはんもまだだというのに元氣なことだ。

流石は、白狼族の一員というだけのことはあるのかな。

「オンオン！！」

2回ばかり元氣に叫んだゴンタくんは、そのふさふさの毛で小さな風を捕まえながら、おんなじように捕まっているミアさんこと行き先を決めたのさ。

右に曲がって、左に3回。

突進すれば、トンガ村のと真ん中さ。

真ん中に立つてるトンガ村の村長の手作りの彫像が「ようこそ、トンガ村へ」って挨拶してくれている。もちろん、その後ろには村で一番大きな井戸が掘られているよ。

その井戸には、村の西南にある人魚の泉に流れている水とはまた別のものが流れているのさ。

「うわああ、つきみかげ月水影の色が変わってるううううう！！！」
「いけない、もうこんな時間だ！」

「オンオン！」

ミアさんの眼には、きつと井戸から漏れる月水の輝きが見えたんだろうね。つきみすいど月水井戸の光は時刻によつては色や輝き方が異なるから、時間を計るにはいいって云われてるんだよ。

つきみす月水は月の輝きを宿した水。

古代の月の光が融けたものだと言われているよ。

お酒作りがお仕事のランデさんは、その月水を使って大切な落花酒を作るんだよ。

四季の花を月水に浸けて発酵させた落花酒はトンガ村ではお祝いのときの大事なお酒になっている。夜闇の中でも発光する色とりどりのお酒なんて最高じゃあないか。

「って、そのまえにどうすればいいの！！！」

このままだとお家に突っ込んだんじゃうよ！！

「…オン！」

なんてミアさんが叫んだ瞬間に、ゴンタくんが急停止したんだな、これが。

「…ゴンタ、くんっ！！！」

それは真っ青の顔をしたミアさんが、そんなゴンタくんに「なんぞ？」って言いたそうな表情で振り向いたようだったよ。

もちろんそんなミアさんの足元は既に滑っていたから、ミアさんの視線は低い場所からのものだったよ。

それはもう怖かったんだろうねえ。

「……………」

「……………ありがとう、ゴンタくん」

真っ青な顔でゴンタくんにお礼を言ったミアさんの心臓はそりゃあドットコドットコ激しく動いてたよ。

「……オン」

滑りかけてたミアさんの身体の下敷きになったゴンタくんは「仕方ないなあ」とでもいうかのように舌を出して笑っていたようだったよ。

表情豊かな白狼族っていたんだねえ。

まあ、ゴンタくんだからねって、ミアさんだったら笑って終わらせるんだろっけど。

？

「ただいま、ラクトさん、アイリスさん」

「うおん」

『閉』の札がかかっている扉を開くと、掃除も終わって綺麗になった【降る星亭】のなかで今日のメニューを書いているアイリスさんと厨房の片づけをしているラクトさんが待っていたよ。

「おかえりなさい」

「…おかえり」

笑顔で返事したのはアイリスさんだし、言葉少なく返事したのはラクトさんさ。

ラクトさんはあいかわらず口が重いねえ。

アイリスさんはまだ少し今日のメニュー表の出来上がりに納得いってなかったようだったけど、幸い開店時刻にはまだ少し時刻があったから後に行うことにしたようだったよ。

「さ、ミアさんも一緒に手を拭いて朝ごはんにするわよ」

「はい」

飲食を商う【星降る亭】だから、清潔はとても大切だ。

砂だらけのゴンタ君を見て、調理を終えたラクトさんが沈黙しながら眉間の皺を寄せていたよ。

ただでさえ泣く子も黙ると言われる強面のラクトさんだから、それはもう怖いってモンじゃないさ。

ただし、このトンガ村では誰もラクトさんが怖いなんて言う奴はいないけどもねえ。

なにしろ、蓋を開ければラクトさんがただの料理好きの愛妻家の娘大好きな名料理人だということはもうトンガ村の皆さんには判っ

てしまっているんだから。

た・だ・し。 その最初の蓋を開けるまでの間は怖がられるのも本当ではあるんだけどもね。

「さて、ゴンタさんはご飯の前にブラッシングです。 さ、お外へ出てくださいな！」

「…ウオン」

掃除道具を片づけたばかりのアイリスさんがなんだか怖い気のする笑顔でゴンタさんに命令したよ。笑顔が怖いのは、彼女が店のお掃除担当責任者でもあるからさ。

朝のお掃除を終えたばかりの店内に新しい塵を持ちこまれたらたまったものじゃないからねえ。

片づけた筈と塵取りの代わりに、アイリスさんはゴンタ君専用のブラッシング用のブラシを手に取った。

「ミアさんは先にご飯を食べちゃうこと！」

ラクトさんがせっかく作ってくれたんだからね、あったかいうちに食べなさい。

「ええええ？ そんな寂しいよ、アイリスさああん」

朝ごはんくらいは皆でご飯食べたいです！

アイリスさんの命令はどうやらゴンタくんだけにではなく、ミアさんにも下されたようだったけど、ミアさんとしてはそれはちょっとあんまりな命令だったようだ。

なにしろ、この【星降る亭】はトンガ村唯一のお食事処であると同時に居酒屋であり、宿屋である。

今の時期、トンガ村にはお客さんは来ていないので朝ごはんはゆつくり食べれるが、昼と夜ごはんはそうはいかない。遅めの昼ごはんはたいていはミアさん、アイリスさんの順番で一人ずつ取っているし、夜も忙しく交互に食べるのがようやくだ。

ちなみにラクトさんは厨房が空いてるすきを見て、つまんだり食べたりしてるようだ。 おつかれさま。

まあ、そんなわけでなかなか皆でゆつくりごはんを食べるなんて

言うのは、ミアさんが【星降る亭】を手伝うようになってからじゃなかなか出来なくなっちゃってね。

だから、ミアさんちでは朝ごはんは家族と一緒にとることというのがみんなのお約束になっている。

まだまだお客さんも来てない時間にのんびり家族でお喋りしながら楽しもうよと言ったのはミアさんだったのかアイリスさんだったのか。

ラクトさんは賛成した人であったことは確実だけど。

なにしろラクトさんは照れ屋さんだからね、なかなか彼には言えない内容のお約束であることは確実なもの。

そんな仲良しな【星降る亭】だけど。

今日の朝ごはんは、なぜか朝の散歩を遠出していたゴンタくんの気まぐれのおかげでミアさんだけが遅れてしまったようだよ。

食事は美味しいうちにすますこと。

これは【星降る亭】における最大原則。

だから、素直に朝ごはんをすませておいたアイリスさんとラクトさんに罪はないのさ。

「ふえええええ。ゴンタくんのバカああああ」

…ウオン！

すでに今朝から何度目か判らないゴンタ君へのミアさんのべそはお外に出ていたゴンタくんにも聴こえたようだったよ。

反省してるのかは怪しいと思うのだけでもね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0474r/>

星降る宴

2011年7月1日03時15分発行